

異世界の修道院の告解
室に転生した元銀行員
の Ω カントが異端審問
官 α に「神はお前を俺
の番として与えた」と
 Ω を隠していたことを
暴かれ聖堂の祭壇で番
にされる話

聖堂の石柱に背中を押しつけられたまま、ルカは自分の身体に起きていることが信じられなかった。修道服の下で肌が粟立ち、腹の奥がきゅう、と絞られるように疼く。

「……っ、なん、だ……これ……っ♡」

抑制薬草が切れたのは昼だった。夕刻から微熱のように全身がぴりぴりと過敏になっていたが、まだ耐えられると踏んでいた。前世で三十五年間、男として生きてきた。融資審査で千人の債務者を捌いた理性がある。こんなもの、気合いで――

甘い考えだった。

聖堂の扉を開けた瞬間、鉄と香木を焦がしたような重い匂いが鼻腔を殴りつけてきた。♀のフェロモン。十年間、蓋をし続けた♀の身体が――匂いを嗅いただけで、膝から崩れた。

「来たか」

蠟燭に照らされた祭壇の前に、黒衣の男が立っている。百九十センチを超える長身。撫でつけた黒髪。鎧のような肩幅。異端審問官セヴェル。

――十年前、嵐の夜に薬草をくれた少年の面影は、どこにもない。

「……っ、立て、ない……っ♡♡」

壁に手をついて身体を支えようとするが、指先が滑る。汗だ。修道服の下で全身が汗ばんでいる。布地が肌に触れるだけで、背筋に甘い痺れが走った。

セヴェルが歩いてくる。重い靴音が聖堂の石床を叩く。二十歩。十五歩。十歩。

「葉草が切れたな」

ルカは唇を噛んだ。認めない。認めるわけにいかない。

「……風邪だ。昨日から調子が悪い」

「風邪で、こんな匂いはしない」

残り五歩。フェロモンの濃度が跳ね上がる。うなじの左側——項腺が、びくん、と脈打った。十年間、フードの下に隠し続けてきた場所が灼けるように熱い。

「う……っ♡♡ ちが……っ♡」

（——なんだ、身体が、勝手に——）

前世にはなかった感覚だ。腹の奥から這い上がってくる、どろりとした疼き。理屈で名前をつけるなら発情。だが理屈と身体は別物で、股の間がじわりと潤んでいく。何も触れていないのに。

「十年前のあの夜、お前がフードの下で隠していたもの」

セヴェルが目の前に立った。三十センチの距離。見上げなければ顔が見えない。灰色の瞳が蠟燭の炎を映して揺れている。

「あの匂い。今、お前の全身から漏れている」

「……っ♡」

逃げなければ。ルカの前世の本能が警告する。債務超過の案件だ。回収不能。損切りしろ。――だが足が動かない。セヴェルのフェロモンが四肢を縛りつけている。

修道服のフードに、セヴェルの手が伸びた。長い指がフードの縁を掴み、ゆっくりと引き下ろす。

亜麻色の髪が零れ落ちた。うなじが剥き出しになる。

項腺が脈を打つように赤く染まっている。蜂蜜を焦がしたような甘い匂いが、聖堂の冷たい空気に溶け出した。

セヴェルの瞳が揺れた。冷酷な審問官の仮面の下で――何かが、剥き出しになる。

「……やっと見つけた」

低く掠れた声。十年間の渴きが滲んでいた。

（――この声。あの夜の――）

嵐の夜。修道院の裏庭でうずくまっていた自分に、黙って薬草の束を差し出した少年。名前も聞けなかった。礼も言えなかった。翌朝には巡礼団と共にいなくなっていた。

あの少年が——こんな大人になって、俺を追いつめて来た。

セヴェルの指先が、ルカの項腺に触れた。

「ひ、あ……っ♡♡♡」

電撃だった。指一本で全身が痙攣した。視界が白く明滅する。膝が完全に碎けて、倒れかけた身体をセヴェルの腕が受け止めた。

「っ、離……せ……っ♡♡」

「立てないだろう。十年分の反動だ」

抱き留められた腕から、そのフェロモンが直接肌に叩き込まれる。身体がびくびくと震え始めた。修道服の下で乳首が硬く尖っている。布が擦れるだけで甘い声が喉の奥からせり上がってくる。

「——前世で三十五年、男だった。こんな声は出したことがない。こんな——身体反応は——」

セヴェルがルカを石柱に押しつけた。冷たい石が背中に触れ、正面にはセヴェルの胸板。顔が黒い長衣の布地に埋まる。鉄と香木の匂いが濃い。頭がくらくらする。

「お前はずっと一人で耐えてきた。十年間、薬草で本能に蓋をして、誰にも頼らず、*β*のふりをして」

低い声が耳朶を擦る。吐息が項腺にかかった。

「もう——蓋を開けろ」

「……っ、勝手に……決めるなっ♡♡」

齒を食いしばった。融資審査で千人の嘘を見抜いてきた男が、自分の嘘だけは守り通そうとしている。だが声が震えている。身体が震えている。修道服の前が——汗と、それだけではない液体で、じつとりと濡れ始めていた。

セヴェルの手がルカの修道服の前を掴んだ。

引き裂いた。

布が裂ける乾いた音が石造りの聖堂に反響した。ボタンではない。胸元から腹まで、力任せに一気に裂かれた。

「やめ……っ♡♡　ここは、聖堂——っ♡♡」

「聖堂で十年嘘をつき続けた男が、今さら神聖を語るな」

冷たい空気が露出した肌を舐めた。紅潮し汗に濡れた胸。肋骨の浮いた白い身体。乳首が既に硬く立っている。

セヴェルの視線がルカの胸に落ちた。

「……男の身体で、こんなに乳首を立てせて」

「っ♡♡ 見るな……っ♡♡」

親指が右の乳首に触れた。

「うあ……っ♡♡♡」

押し潰すように、ぐり、と回された。たったそれだけで腰が跳ねた。石柱に後頭部がぶつかる。鈍い痛みすら快感に変換される。

「声を殺すな。聞かせろ」

「やだ……っ♡♡ こんな声……っ♡♡ 出したこと……ない……っ♡♡」

左も長い指で摘ままれた。両方同時に引っ張られ、捻られる。腹の底からぞわぞわと甘い電流が下腹部に落ちていく。

「ひ……っ♡♡ あ……っ♡♡ やだ、なんで、乳首なんかで……こんなっ♡♡♡♡」

（――前世では、男の乳首なんて何の感覚もなかった。触られただけで――）
身体と記憶の乖離が理性を削る。三十五年間の男としての自己認識が、指二本で蹂躪されていく。

「十年間、誰にも触れさせなかったんだろう。溜まった分が全部、今出てきている」

「うるさ……っ♡♡ 分析するな……っ♡♡ 審問官の、くせ、に……っ♡♡♡♡」

「審問官だから分析する。――お前の身体は、とっくに白状している」

セヴェルの手がルカの腕を掴み、石柱から引き剥がした。聖堂の奥――告解室に向かって引きずっていく。足はもうまともに動かない。半ば抱えられるようにして暗い回廊を進む。

告解室の扉が開いた。格子窓のある狭い木造の個室。懺悔席に押し込まれる。

セヴェルが入ってきて、扉が閉まった。

大人二人が入ればいっぱい空間。身体が密着するほど近い。♀のフェロモンが密室に充滿した。呼吸するたびに身体が反応する。項腺がどくどくと脈打ち、腹の奥がきゅうきゅうと締まる。

「審問官として確認する。残りの服も脱げ」

「……はいっで……っ♡♡」

「格子の向こうは神の目だけだ」

引き裂かれた修道服が肩から落ちた。下に着ていた粗末な肌着も剥がされる。蠟燭のかすかな光の下に裸体が晒された。

細い身体。狭い肩幅。銀行員時代から変わらない瘦躯。——だが股の間には、前世にはなかったものがある。

セヴェルの視線が、上から下へ辿った。胸。腹。腰骨。そして——

「……っ♡♡ 見るな……っ♡♡」

太腿を閉じようとする。セヴェルの膝が割って入った。

「隠すな。十年隠してきたものを、今さら」

長い指が太腿の内側をなぞった。皮膚が薄く血管の浮いた場所を、指の腹でゆっくりと撫で上げる。

「う、あ……っ♡♡ そこ……っ♡♡ 触るな……っ♡♡♡」

指が股の間に到達した。ヒートの影響で、身体は既に潤んでいた。指が秘裂に触れた瞬間、とろりと粘度のある透明な液体がセヴェルの指を濡らした。

「……ここまで濡れていて、まだぬだと言い張るか」

唇を噛み切りそうなほど強く噛んだ。鉄の味が舌に広がる。

「たい、しつだ……っ♡♡ 男でも、分泌液くらい……っ♡♡」

「では——これはどう説明する」

セヴェルの指が項腺を押した。

全身がびくん、と弓なりに反った。告解室の木の壁に背中が叩きつけられる。甘い匂いが密室に爆発した。

「十年前と同じ匂いだ。一晩だって——忘れたことはない」

目から涙が溢れた。唇を噛んでいるのに嗚咽が漏れる。十年間の孤独な努力が——この男の指一本で崩壊していく。

「……っ♡♡ お前の、せいだ……っ♡♡ お前があの夜……匂いを嗅がなければ……っ♡♡」

「嗅いだ。そして十年間探した。——それだけの話だ」

セヴェルの指が秘裂をゆつくりと撫で始めた。

「ふ、あ……っ♡♡ やめ……っ♡♡」

裂け目の浅い部分を、上から下へ、下から上へ。指の腹で花卉を押し広げるように、ぬるぬると滑らせる。溢れる潤滑液が指を導いて、抵抗のしようがない。

「あ……っ♡♡♡ あ……っ♡♡♡ そんな……っ♡♡♡ 指で、こんな……っ♡♡♡♡♡」

（——前世で、女性器に指を入れたことはある。する側で。される側になるなんて——）

「ひ、あ……っ♡♡♡ そこっ♡♡♡ そこ、だめ……っ♡♡♡♡♡」

指先がクリトリスに触れた。ぱんぱんに充血した小さな突起を、爪の先でかりかりと引っ搔かれる。

「ひう……っ♡♡♡♡♡ あ……っ♡♡♡♡♡ やだ、やだやだ……っ♡♡♡♡♡ こんな、ところ……触ったこと、なかったのに……っ♡♡♡♡♡」

「自分では触らなかったのか」

「っ……♡♡♡ 当たり前、だ……っ♡♡♡ こんな身体……認めたく、なかった……っ♡♡♡♡♡」

セヴェルの指が止まった。一瞬——ほんの一瞬、灰色の瞳に何かが過ぎった。だがすぐにその表情に戻る。

「なら俺が教える。お前の身体が、何を求めているのか」

二本の指が秘裂の奥に沈んだ。

「おお……っ♡♡♡ は、入って……っ♡♡♡ 指が、中に……っ♡♡♡」

ヒートで過敏になった内壁がセヴェルの指に絡みついた。ぬるぬると潤んだ肉が指を締めつけ、同時にぐちゅ、と卑猥な水音が告解室に響く。

「っ♡♡ やだ……音……っ♡♡ こんな音、前世で聞いたことない……っ♡♡♡」

声が裏返る。前世の記憶が邪魔をする。男として三十五年間生きた記憶が、今この身体で起きていることを否定しようとする。だが否定しても――指が動けば、身体が応えた。

セヴェルの指が奥へ進んだ。内壁の表面を探るように、指先が這い回る。

「こ……っ♡♡ そこ……っ♡♡ なに、そこ……っ♡♡♡」

ざらざらとした壁面を指の腹で擦り上げられた。腰が跳ねる。告解室の壁に頭がぶつかった。

「Gスポットだ。十年間使わなかった身体にも、ちゃんとある」

「お……っ♡♡ おお……っ♡♡ そこ、やめ……っ♡♡ 壊れる、壊れ……っ♡♡♡」

指が容赦なくその一点を擦った。内壁を押し上げるように、ぐり、ぐり、と圧をかけながら、同時に親指でクリトリスを転がされる。

「ひお……っ♡♡♡ おおお……っ♡♡♡ だめ、同時は……だめ……っ♡♡♡」

上と中を同時に責められて、思考が白く溶けていく。前世の計算能力が最後の抵抗を試みた——朝の鐘まであと何時間だ。修道士たちが起きてくるまでに。この状況を。どうにか。

計算は完了しなかった。

セヴェルの指が三本目を捻じ込んだ。

「おおおおッ♡♡♡ ……っ♡♡ ……っ♡♡♡ み、三本も……っ♡♡♡ 入らな……入って……るっ♡♡♡」

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ。告解室の木の壁が軋むほど身体が跳ねた。三本の指が奥まで沈み、内壁を万遍なく擦り上げる。溢れた潤滑液がセヴェルの手首を伝い、床板に滴り落ちた。「十年分だ。これが——お前がずっと蓋をしてきたものだ」

「うるさい……っ♡♡♡ 黙れ……っ♡♡♡ 審問官のくせに……っ♡♡♡ 偉そうに、分析……するなっ♡♡♡」

「お前こそ——銀行員のくせに、こんな帳簿外の取引を十年も隠していたのか」
「……っ♡♡♡」

帳簿外の取引。その言葉にルカの中で何かが弾けた。こいつは——俺の前世を知っている。査察で経歴を洗ったのだ。

反論しようとして口を開いた瞬間——セヴェルの指が項腺とGスポットを同時に押した。

「おおおおお……っ♡♡♡♡」

身体が弓なりに反り返り、告解室の中で絶頂した。

ぷしゅ、と音がして、セヴェルの指の隙間から透明な液体が噴き出した。潮だった。太腿を伝い、告解室の木の床を濡らしていく。

十年間、一度も迎えたことのない絶頂。指だけで。男の身体で。

「はっ……はっ……っ♡♡♡ あ……っ♡♡♡ なんて……指だけで……こんな……っ♡♡♡♡」

嗚咽と喘ぎが混じった声が漏れる。涙が頬を伝い、顎から落ちた。

セヴェルが濡れた指を見つめた。

「……十年間、お前は一度もヒートを受け入れなかったのか」

「っ♡♡ 当たり前だ……っ♡♡ 誰にも……知られるわけに……っ♡♡♡♡」

「……ずっと、一人で」